

平成20年度 労働災害防止論文 金賞

労働災害防止と自己意識

(株)ベルックス 藤田孝夫

私は、現在勤務する職場で、設備・清掃の現場管理や事務処理など多種多様な業務を担当しています。学ぶことの多い毎日です。

入社して3カ月が経過した頃でした。未だビルメンテナンスの業務全体を十分に把握していない状況下で、ショッピングモール（フレスポ戸倉8店舗）の新築現場における、各棟サッシ・ガラス等の美装業務の現場代理人を任されたのです。

工事が始まると、現場では、作業前にやることと幾つかの約束事があります。まず、本工事にかかわる全員に、朝8時からのラジオ体操への参加が義務付けられています。その後、各業者の担当がその日の作業内容を説明します。現場監督からは、「ヘルメットの着用、高所作業時の安全帯着用、作業服のチェック」が指示されます。さらに各棟の作業進捗状況等の説明があり、その日の工程を確認します。これらが日課です。

勿論、これらは、労働安全衛生法や労働安全推進法等で義務付けられていることですが、最も重要なことは、各自の認識の持ち方であると私は考えます。作業前の体操は、身体の機能を柔軟にし、緊張を和らげる効果があります。ヘルメット及び安全帯の着用は、不測の事態から身を守る為であり、作業工程の説明は、お互いの意思の疎通を図り、相互理解によって事故を未然に防ぐことにつながります。義務付けられているからとか、現場の方針だからと「仕方なく」やっている所に、恐ろしい事故が潜んでい

るのです。事故防止の徹底を図ることが主たる目的であり、それが自分の身を守り他人をトラブルに巻き込まない最良の策であることを十分に理解することが大切だと考えます。

一口に事故と言っても、出退勤時の通勤災害、就労中の業務災害、不注意による物損事故等様々な形態があります。いずれにも共通して言えることは、ルール無視、ストレス蓄積、自己過信、状況判断ミスが主な要因であるということです。これらが重複した時に事故が発生する確率が最も高くなると言われています。事故要因のメンタルな部分としては、「誰かがやるだろう」「上司が段取りしてくれるから」あるいは「時間が無いから」はたまた「面倒くさいから」といった、人任せ的な考え方やゆとりの無い行動が考えられます。自らの責任と判断による状況確認、指差し確認、相互確認（何事も声を掛け合う）を率先して実行することが大切だと考えます。

現場代理人として従事する私に、これまで述べてきたことへの理解や実践力が十分に備わっているとは言えません。でも、そこに近づく努力をし続けたいと思います。「ああすればより安全に……」「こうすればもっと効率的な……」等々の反省を、少しでも次の仕事に生かしていきたいと思います。

一日を無事故で終えたことに安堵しながらも、“明日もまた万全の注意を払って！”と気持ちを引き締める毎日です。

平成20年度 労働災害防止論文 銀賞

私の健康法

(株)ベルックス 竹内 幾子

朝の目覚めから出勤する迄の時間の過ごし方次第で、少なからずその日が変わってしまうような気がします。朝の余裕がスムーズな仕事運びとなり、達成感で満たされてその日が終了し、より良い明日へとつながっていくのだと思います。その為にも、日々の疲れは一刻も早く取り去りたいと願うものの、年齢を重ねる度に難しくなってきます。軋む体にムチを打って日々頑張っている人は大勢いることでしょう。

総ての基本は「体！元気」です。その為にも私は、少しでも睡眠を質の良いものにしたいと思い、実行していることがあります。眠る一時間ぐらい前には、部屋の灯りを間接照明にします。枕元には、好きな香をと心掛けますが、高額な物を用意するのではなく、石鹸、果物、お花、果物の皮などを利用したりドライフラワーでポプリを作ったりと工夫しています。枕は度々買い替えるものでもないのに、奮発して、自分に合った高さで材質で納得のいくものにしていきます。それに頭を沈めると、気持ちがゆったりとします。照明と香りで睡眠への司令塔を脳に送り込む為か、とても寝付きの良い私です。しっかり眠らないことには明るく元気な明日がないのですから、目覚めスッキリとしたいものです。

仕事の仕方にも私なりの一石二鳥があります。仕事で一石二鳥なんて、とお叱りを受けるかも知れませんが、一つ一つの動作が私のストレッチと考え、家を出る時からそれはスタートしま

す。勿論、ウォーキングです。闇雲に早足でチョコマコと膝歩きにならないよう気を付けます。股関節に筋肉を付けることを考えつつ、正しい姿勢で広い歩幅で歩きます。「肋骨の下から足だと思って歩くことで体は変わってきます」と言っていた人がいましたが、筋肉を意識しつつ動くことで良い結果が生じてくるような気がします。

現場での仕事が始まります。掃除機やモップをかける時、ガラス面を磨く時、テーブルや机を拭く時などなど、どの場面でもしっかりと筋肉を使って行います。決して小手先だけのことのないようにしています。それが自然に身に付くと、まるでスポーツジムで体を動かしているかのように、体にもとても良いのです。意識して体を動かすことで、集中力も高まり、それが事故の未然防止にもつながっていくと思います。仕事そのものへの感謝の念も倍増、まさに一石二鳥です。

抗えない災害はどうすることも出来ませんが、身の回りで起こる事故を自らの努力で防ぐことは可能です。そして、労働災害を極力なくす為にも不可欠なのが体力づくりです。そのためにも、今後も体力づくりに励み、元気な体で労災ストップを目指します。

快適な睡眠とスッキリした目覚めで始まる一日、仕事への感謝の気持ちを忘れず、精一杯頑張りたいと思います。

平成20年度 労働災害防止論文 銅賞

ヒヤリ・ハット体験を活かそう

北海道クリーン・システム㈱ 市川直美

今年3月の入社時研修で、当社の事故防止の三本柱「基本動作、基本作業の遵守」「情報連絡と確認の徹底」「感受性を高めた作業の実施」等、安全教育を受けた直後の出来事です。当日、現場実習で私に清掃作業の指導に当たってくれた清掃員が階段を上っている時、足を踏み外して転びそうになった所を見ました。これがもし転倒して階段の何処にぶつけて怪我をしたら、もし後ろに倒れ、階段から落ちていたら大きな怪我に繋がっていたでしょう。またその場にお客様がいたら巻き込んで大きな事故になっていたと思われま

す。私自身大学3年の時、交通事故に遭いました。自転車で通学途中、信号機のない道路で道路沿いに直進する私の自転車と横道から道路に出ようとするハイヤーの双方が一時停止で止まっていた状態の時でした。私はハイヤーが止まっていたので、自転車を先に通らせてくれるものだと思います。動いた直後ハイヤーも同時に発進して接触しました。私は転倒し、額にたんこぶを作った程度で済んだ事故でしたが、今まで毎回発生している事故をニュースで知っていても、いつも他人事のように見たり聞いていた事故を初めて実体験しました。何気ない日常の中で、事故の危険性は周りに溢れているのだと改めて実感しました。

私達は自分が望んで事故を起こしているわけではありません。無意識の内に起こしているのです。清掃業務、産業廃棄物の収集運搬等、一人で回ることが多い当社の仕事は、何かに気をとられ、時間に追われ、些細な事故を起こしや

すい状況にあると思われま

す。では、どうすれば再発予防が出来るのか。一つには、事故情報を従業員皆が共有化し、類似した事故を皆が起こさないようにすることです。それには、どんなことでも報告しやすい環境、従業員とのコミュニケーションが大切になってきます。

当社は、平成20年度事業計画の重点施策の取組みの中に、『ヒヤリ・ハット活動』の定着を目標に掲げています。又、全員に配布されている社員手帳は、ヒヤリ・ハット体験を記入出来るメモ帳にもなっています。

これは皆が関心を持つよう工夫されたものです。事故防止意欲の高揚を図るため、全職場が取り組んでいます。

入社6ヶ月の私が今やれること、私の職場、資源リサイクル事業推進センターには、15名(社員含む)のドライバーの方が日々、産業廃棄物の収集運搬のため、車の運転をしています。職場のドライバーの皆さんに帰着時「お疲れさまです」の一言と、「今日は危ないことありましたか」の声かけを実践していき、ドライバーの皆さんから聞いた情報を社員手帳の「私のヒヤリ・ハットMEMO」を参考にWordで作成し、皆が閲覧できるようにすることと、併せて他の職場で発生したヒヤリ・ハット事例を掲示板に掲載し、ヒヤリ・ハット体験を皆が共有しやすい職場環境を目指すことにより、事故の芽を少しでも摘み取ることが出来るものと信じ、行動してまいります。

平成20年度 労働災害防止論文 銅賞

馴れ合いは大敵 事故の基

北海道クリーン・システム(株) 弥田 三也

初心を忘れ、基本動作、基本作業を守らず、いつもと同じと思って作業をしていると、どんなベテランでも事故に遭遇します。

私達、鉄道関係業務に携わっている者としては、なんと言っても安全が第一条件です。

大切なお客様に迷惑をかけない、会社に損害を与えないことが大切です。

私の職場の業務は、JR旭川駅の駅舎清掃と、発着する列車の車内清掃が主な業務であります。今年の3月に私の職場で残念ながら列車を遅らせるという事故を発生させ、職場の中は暗く、緊張した雰囲気になりました。

事故の内容は、特急列車の到着後、車内清掃を行う際、お客様に周知を図り、車内に入らないよう出入口に清掃作業中の看板を掲出し、終了後一斉に取り外しますが、このうちの1箇所を失念してしまいました。そして列車は所定時刻に発車しましたが、次の停車駅で、その先頭車両のドアが閉まらなくなり、関係者が調べたところ掲出板がドアの戸袋の中に入ってしまいドアの開閉に支障させてしまったことが原因でした。旭川駅は、いつも沢山のお客様でにぎわっておりますが、このような大勢のお客様を対象に働く私達は身の引き締まる思いで責任を感じます。そして私達の身の回りには、常に事故という二文字が大きな口を開け待ちかまえているのです。一つひとつ確実に基本動作を繰り返し、これらを遵守し再確認する事により、ほとんどの事故が未然に防げるのではないのでしょうか。

「あの人はやっていないから俺もいいんだ」というように、一人ひとりが基本や決められた事が守れないことにより連鎖反応を起こし、ここから気の緩みが生じ、馴れ合い、手抜き、憶測作業、そして最後に事故につながっていくこととなります。私も幸にして事故に結びつきませんでした。「ハット、ヒヤット」したことが幾度かありました。しかし、こんな事をしていたのではいつかは自分の身に降りかかってくるのではないかという不安にかられます。「事故ゼロ」、この素晴らしい言葉は会社の、そこに働く者、家族への何よりの贈り物であり、会社の繁栄を表すに相応しい言葉ではないでしょうか。安全は与えられるものではない、自分で、自分達で作り出すものだとして良く言われます。与えられる安全とは、事故防止についての注意、指導する人の長い間の経験と研究から生まれたものであり、それを一言の注意だけですべてを理解し、行動に移せるものではないと考えています。その注意指導をいかに自分のものにするか、その努力を忘れてはなりません。

私は、事故を防ぐには組織、つまり全員が参加し、取組むことによりその成果は大きく計りしれない「力」となり無事故、無災害の職場が確立されるものと考えています。「企業は人なり」と言われていますが、私達一人ひとりがこの会社の大切な財産であり戦力であることを自覚して、今後も無事故、無災害が継続するよう全力で取り組んでまいります。

平成20年度 労働災害防止論文 佳作

労働災害防止への提言

東京美装北海道(株)斜里出張所 篠田良一

テレビ、新聞のニュースで労働災害事故の報道を目にすることが多い。労働災害防止は事業者にとっては最大の命題である。ビルメン業では事故により顧客の財産に多大の損害を与えてしまうばかりではなく、会社の存亡にもかかわる重大な事である。私は労働災害防止対策について二つの視点から述べてみたい。一つ目は資機材の安全管理の問題である。

私は以前、草刈機の点検不備により目を怪我し、一週間程通院した経験がある。原因はカバーが1センチほど破損していたためであった。事故はいくつかの条件が重なり、起こるべくして起きるものである。作業機器についているカバー類は事故防止のために装備されている。それらを外したり、慣習的な自己流の作業、改善は自己の要因になる。基本的な操作方法と保守点検は徹底されなければならない。資材においても使用方法が明記されているが、それに従わず事故を起こす例も後を絶たない。機器や資材の注意書き、取扱説明書を読んで作業に当たる人は何人いるだろうか。思い込みでの使用は常に危険との隣り合わせである。保護具においては自らを守るものであると同時に、実は事業の継続をも守っている事を再確認すべきである。二点目は人的要因による原因の対策である。人間は誰でも思い違いしたりするものである。ボンバルディア社の航空機が胴体着陸した事故はたった1本のボルトが原因であった。100%以

上の安全性が求められる航空機でさえこの様なミスが起きるのである。我々の業務において、それぞれ安全性の基本事項は実行されていると思うが、時として単なる習慣になっていないだろうか、人間の行動はその時の心理状況、体調、作業時間と様々な条件に影響を受ける。これらの対策については連絡、報告、相談を基本にして、複数の目による点検が重要であり、それらを実行する為には、組織が十分に機能している事が必要である。職場の人間関係が良好で、風通し良い職場ではいろいろな安全マニュアルが確実に実行され円滑に機能するはずである。職場の組織が個人のミスを未然に防ぎ、万一起きたとしても被害を最小限に防ぐ事も可能である。しかしながらその様な職場はあまり多いとは言えない。得てして成果主義に走るあまり互いに欠点の指摘になりがちである。職場を構成する一人一人が相互に信頼を構築し、互いの長所欠点を認め合う事が安全意識をより一層高めると思う。さらに個人と組織体との危機管理意識の整合性が労働災害防止の重要なポイントでもある。最近、経営環境の厳しさの為、法令遵守がおろそかになっている傾向がある。反社会的な行為は企業の存続に終止符を打つ事になる。豊かな人間関係と法令遵守こそが労働災害防止の第一歩であり、企業の永続な発展の基本であると確信する。

平成20年度 労働災害防止論文 佳作

明日への健康のために

(株)ベルックス 滝澤和彦

「のろのろするなと言うけれど、年をとった
ら足が弱くなって動きが鈍くなるのは当たり前。
バスでも乗れば立つのがしんどいし、座りたく
もなりますわ。年寄を押し退けていく若者もお
かしいと違いますか」—新聞で拝読したある老
人の声です。加齢現象とともに誰もが自分自身
の問題として考えなければなりません。

高齢化社会を迎え、国民の中に「健康」への
関心が一段と高まってきています。私たちは、
健康で暮らしている時はあまり感じませんが、
いざ自分が不健康になった時にはじめて健康の
有難さが分かるものです。現に、闘病生活で不
安な日々を送っている人も大勢いますし、もし
かすると、明日は我が身かも知れません。日本
人は、病気になってからお金を使い、予防には
あまりお金をかけない国民性のようです。

健康を害する要因の一つに、現代病と言われ
る精神ストレスがあります。職場では、性格や
欲求の異なった人たちが働いています。そうし
た中で、チームワークや人間関係が円滑にいか
ない時に、精神的緊張が高まり血圧も上がりま
す。神経が刺激されると食欲も低下しますし、
胃腸の働きも悪くなります。そうならないよう
にする為には、出来るだけストレスが蓄積され
ないよう「心」の健康を図ることが大切です。
職場でイライラしたり腹を立てたりしない為
には、(1)自分の性格やおかれている立場を、客観
的に冷静に見てみる、(2)自分でこうだと決め付

けずに、相手の言い分や意見を十分に聞いて誤
解の起きないようにする、(3)自分が非難を受け
ても、理性を失わず、決して感情的にならない、
などが大切です。そこには、人間的な成長が必
要かとも思います。私自身も、まだ十分に成長
しているとは言えませんが……。

107歳で天寿を全うされた清水寺の前貫首・
大西良慶さんは、健康について「長寿は健康に
あり。健康と言うたら規律、規律と言うたら、
よう食べてよう働いてよう眠って、この3つを
規則的に過ごすことが肝要。規則正しさは、辛
抱によって守られる。人間にあるいろいろな欲
望を堪えることが大切」と語録に残しておられ
ます。「健」は肉体の健やかさ、「康」は心の安
らぎを示し、心身が互いに関連してはじめて健
康が保たれます。

時代とともに世の中が便利になり過ぎて、昔
と比較すると、歩くことも少なくなりました。そ
の積み重ねが足腰の老化を早めています。そこ
で、日常生活では、出来るだけ歩くことを心掛け
たいものです。歩くと言ってもダラダラのんび
り歩くのではなく、急ぎ足で歩いた方が心肺機
能を高め筋肉や関節を鍛えることが出来ます。

高齢化社会の現在、“自分の体は自分でしっ
かり守る”という気持ちと、その為の努力が必
要です。ライフサイクルを通して、職場で家庭
で快適な人生を目指し、健康にプラスになる生
き方をしたいものだと思います。

平成20年度 労働災害防止論文 佳作

ビルメン作業にもKYTを

(株)ベルックス 大谷 邦雄

「KYT」と言っても「空気が読めない父さん」ではありません。二十数年前から建設現場で盛んに行われてきた、危険（K）予知（Y）トレーニング（T）を意味します。建設現場は、高所作業・飛来落下・重機災害・溶接溶断・電動工具・感電事故等の労働災害の「宝庫」とも言える労働環境の職場です。

私は、この業界に入る前は、設備技術者として建設現場で技術管理・安全管理の仕事をしておりました。その経験により、KYTをビルメン作業に生かす方法を提案させていただきます。

仕事に限らず、遊びや交通事故などでケガをした場合、「まさか自分が事故に遭うとは……」と思う人が多いのではないのでしょうか。多くの人は、自分に危険が降りかかるとは予測していないのではないのでしょうか。つまり危険を予知していないわけです。しかし、もし自分に降り掛かる危険を予知していたならば、その結果は当然変わってくるのではないのでしょうか。そのため、常に危険を予知できるようにし、事故を防止・軽減しようとするのが危険予知トレーニング（KYT）です。

危険予知トレーニングと言っても、特に何か施設や道具が必要なわけではありません。私の過去のKYTの経験から考える大切な要素は、「想像力を働かせる」ということです。

例えば、車の運転中を例に挙げれば、歩行者が信号無視で横断歩道を渡るかも……物陰から急に子供が飛び出してくるかも……交差点で右折する時、対向車が来るかも……等々、皆さんは

普段から何気なくKYT（危険予知）をしているはずなのです。

その、車の運転時のKYT行動を、各業種・各作業に当てはめるのです。作業を始める前に、一時立ち止まってこれから始める作業を想像してみてください。そして、自分の脳の中で、自分が作業している場面を映像化し、他人の目から見たとしてどんな危険があるかを考えるのです。また、自分の作業だけを考えるのではなく、同僚が行っている作業を見ながら、同じく危険を考えるのです。

このように、いつも、作業前や、同僚の作業を見て危険を想像することにより、その危険を予知する能力が養われるはずで、そうならば、何かの作業を始める前に、「こうなるかも知れないから、こうしよう」と、自然に危険の発生を防ぐようになるでしょう。このような行動が、危険を予知するトレーニング（KYT）の意義です。

労働災害において、「事故を起こしても、会社も家族も誰も喜ばん。何より自分自身が痛い目に会うだけ」とよく言われますが、誠にその通りで、労働災害は何としても防ぐべきものです。したがって、お金も時間もかからず頭の中だけで出来るKYTで事故を防ぐことが出来るならば、大変楽で簡単な事故防止策ではないでしょうか。そして、KYTにより、労働災害を防ぎ、危険（K）が読めて（Y）得した（T）となりましょう。